

『絵入源氏』三種類の字母——「桐壺」巻から——

Differences across three kinds of “*virigenji*” printing type: A case study of *Kiribudo-maki*

沼尻利通

NUMAJIRI Toshimichi

(国語教育)

(平成二十四年十月一日受理)

はじめに

慶安三年（一六五〇年）、挿絵入りの『源氏物語』（以下、『絵入源氏』）を山本春正が出版した。その後、『絵入源氏』は、形を変えて、万治三年（一六六〇年）に、横長の本として出版。寛文年間頃に小型の本として出版された。その形態から『絵入源氏』は三種類に分類でき、最初に出版された大ぶりの本を慶安本、横長の本を万治本、小型の本を無刊記小本（以下、小本）とそれぞれ呼んでいる。万治本も小本も、慶安本を底本にしている。小本が万治本を底本にした可能性もなくはないが、万治本固有の誤植などを、小本は受け継いでいないため、小本は慶安本を底本とし、万治本は底本としていないと考えるべきである。『絵入源氏』は、書承関係が明確である。このことから、物語は忠実に書承されるのか（されないのか）を考える上で、明確なサンプルを提供してくれる。

すなわち、この三本の異同を考えれば、江戸時代初期という限定された時代とはいえ、『源氏物語』の本文がどのように書承されたのかを明らかにできることが期待される。写本では、同じ系統の本文同士でも、書承関係を明確にすることで議論が止まってしまい（どの本が先で、どの本が後かというレベルで話が行き詰まるケースが多い）、どのように本文が変化したのかは結局のところ明らかにできない。その点、江戸時代の版本は、ある本を手本にして作っていることが明確なことが多く、本文の変化を研究する上でもっと注目されてよい。

慶安本を底本に、万治本、小本それぞれが作られていった。しかし、表記はおのおの異なっている。「桐壺」巻のみに限定して検討してみると、たとえば慶安本のふりがな付き漢字を、万治本は漢字に、小本はひらがなに改めている。表記においても、慶安本、万治本、小本はそれぞれ異なっている。慶安本の表記を、万治本、小本がそれぞれどのように

〈表1〉『絵入源氏』三種類（「桐壺」巻）の使用文字数

	総文字数	ひらがな	漢字	比率
慶安本	11057	10005	1052	90% /10%
万治本	10792	9502	1290	88% /12%
小本	11235	10448	787	93% /7%

※「比率」は、ひらがな / 漢字のそれぞれのパーセンテージを示した。

改めたかについては、別稿で論じたが、単純な数字に置きかえて説明したい。慶安本は総文字数が一一〇五七字、そのうち、ひらがなは一〇〇〇五字、漢字は一〇五二字、漢字の一〇五二字のうち、ふりがな付き漢字は三四二字である。ふりがな付き漢字を、漢字として算入し、ひらがなと漢字の比率を比べると、ひらがな九〇%、漢字一〇%になる。万治本は総文字数一〇七九二字、そのうち、ひらがなは九五〇二字、漢字は一二九〇字、そのうち、ふりがな付き漢字は六二字。ひらがなと漢字の比率は、ひらがな八八%、漢字一二%である。小本は、総文字数一一二三五字、そのうち、ひらがな一〇四四八字、漢字は七八七字、そのうち、ふりがな付き漢字は三〇字である。ひらがなと漢字の比率は、ひらがな九三%、漢字七%である。この三本の数値をまとめたもの〈表1〉をみると、万治本は漢字への志向が強く、小本はひらがなへの志向が強いテキストであることがわかる。

表記や本文の異同を精査していくと、万治本と小本はそれぞれのテキストの理論によって、慶安本を改変していることがわかる。本文異同では、万治本は慶安本を忠実に写そうとはしているものの、丁寧には写してはいなかったようで、誤植などのミスを犯すことが多い。一方で、小本は慶安本の本文を、一部、他の本によって改めている。小本の制作者は、源氏物語に一家言ある人物で、自分な

りの根拠によって、慶安本を改変する意志があったことになる。それは、表記や本文の異同というレベルではなく、字母というレベルでは、慶安本、万治本、小本にはどのような異同があるのだろうか。

現在の我々は、一音一字の原則により、一つの字母によって成り立つひらがなを使っている。例えば「あ」は「安」が字母である。「あ」を、「阿」の字母のひらがなで表記することは稀である。字母の異なったひらがなは、「異体仮名」や「変体仮名」と呼ばれ、特殊なものと考えられている。現在のようにひらがな一字に一字母で統一して使うようになったのは、明治三三年（一九〇〇年）の小学校令施行規則第一六条及び第一号表によっている。これによって、ひらがなは、一つの字母のものと定められた。逆に言えば、これ以前は、多様な字母をもとにした、多様なひらがなを使うことが当たり前だったわけだ。もちろん、江戸時代の慶安本、万治本、小本は、それぞれひらがな表記をするさいには、所謂異体仮名で表記する。「け」を表すにしても、「計」や「介」「遣」「希」「気」など、多様な字母で「け」を表記している。本稿では、こうした字母レベルでの異同を、『絵入源氏』三種類の本を素材として検討していきたい。慶安本を手本にした万治本、小本が、字母レベルでそのまま写そうとしたのか、あるいは字母を変えて写したのかがわかれば、それぞれの本の書写意識、すなわち慶安本をどのように変容させたのかの一端がわかるはずである。本稿では、表記レベルの異同や、本文レベルの異同とは違った位相での、字母というレベルでの異同を考察していきたい。

一、写本と版本の使用字母

『絵入源氏』三本の字母異同を考察する前に、『源氏物語』の字母の先行研究をおさえておきたい。字母の研究は国語学の分野で非常に多くの研究がなされている⁴が、『源氏物語』の写本研究に目を転ずると、字母に目をつけた研究は意外と少ない⁵。『源氏物語』の写本は数多く翻刻されている。しかし、その写本の使用字母の一覧や字母使用状況の分析などは添付されていない。どの字母がどのように使用されているかを考えることは、例えば取合本か否かや、書写者の癖、書写された時代、あるいは書写態度を推測する手がかりになるように思えるのだが、今後の研究の進展を俟つよりほかない。そうした研究状況の中で、前田富祺「仮名文における文字使用について―変体仮名と漢字使用の実態―」（『東北大学教養学部紀要』第一四号 一九七一年三月）、斎藤達哉「文字使用から見た専修大学本源氏物語「桐壺」（附翻字）」（『専修国文』第八九号 二〇一一年九月）は優れた業績である。前田富祺は、『更級日記』『平仲物語』『源氏物語』『竹取物語』『雨月物語』の使用字母を比較する一覽表を作成している。『源氏物語』は、『校註證本源氏物語 きりつぽ』（武蔵野書院 一九四八年）の三条西家本を利用し、五〇〇〇字と限定してはいるものの字母を集計分析している。また斎藤達哉は、専修大学本『源氏物語』「桐壺」巻を、字母レベルで翻字している。この前田と斎藤の研究成果を踏まえて、その使用字母の一覽表⁷を作成してみた（表2）（表3）。

前田、斎藤ともに、写本を素材としている。写本の特徴は、一字のひらがなを、多くの字母によって表記するところにある。三条西家本では、一字のひらがなを一つの字母のみで表記したものは九例、二つの字

〈表2〉三条西家本使用字母一覽表

仮名	三条西家本・字母					合計
あ	安 82	阿 1				83
い	以 119	伊 3				122
う	宇 99					99
え	衣 37					37
お	於 108					108
か	可 166	加 106	閑 1			273
き	幾 88	起 81	支 1			170
く	久 122					122
け	計 2	気 49	介 25	遣 1	希 2	79
こ	己 68	古 40				108
さ	左 66	佐 45				111
し	之 236	志 25				372
す	寸 45	春 37	須 14			96
せ	世 56	勢 12				68
そ	曾 51	楚 2				53
た	太 23	多 139	堂 13			175
ち	知 15	地 36				51
つ	川 37	徒 44	津 39			120
て	天 158	帝 2	傳 1			161
と	止 196	登 37				233
な	奈 185	那 28				213
に	仁 48	爾 96	耳 4	丹 42		190
ぬ	奴 25					25
ね	祢 11	年 3				14

仮名	三条西家本・字母					合計
の	乃 98	能 99	農 8			205
は	波 65	者 65	八 82			277
ひ	比 74	日 6				80
ふ	不 31	布 14	婦 15			60
へ	部 72	遍 12				84
ほ	保 53	本 25				78
ま	末 84	満 35	万 42			161
み	美 27	三 39	見 7	身 1		74
む	武 20	無 8				28
め	女 47	免 4				51
も	毛 163	裳 1				164
や	也 16	屋 38				54
ゆ	由 30					30
よ	与 41					41
ら	良 107	羅 1				108
り	利 156	里 26				182
る	留 101	累 8	流 19			128
れ	礼 38	連 45				83
ろ	呂 2	路 18				20
わ	和 2	王 31				33
ゐ	為 2	井 3				5
ゑ	恵 4					4
を	遠 78	越 26				104
ん	无 40					40

〈表3〉専修大学本源氏物語「桐壺」巻使用字母一覧表

仮名	専修大学本・字母					合計	仮名	専修大学本・字母					合計
あ	安 152	阿 4				156	の	乃 337	能 83				420
い	以 246					246	は	八 245	者 141	波 24	半 8		418
う	宇 219					219	ひ	比 146	日 26	飛 8			180
え	衣 91					91	ふ	不 69	布 35	婦 14			118
お	於 250					250	へ	部 171					171
か	可 382	加 93	閑 6			481	ほ	保 102	本 81				183
き	幾 340	起 1	木 1			342	ま	末 222	満 83	万 33			338
く	久 230	具 2				232	み	三 89	美 56	見 25			170
け	計 113	介 27	氣 20	遣 8		168	む	武 92	無 4				96
こ	己 239	古 5				244	め	女 75	免 20				95
さ	左 226	佐 20				246	も	毛 290	母 2				292
し	之 540	志 13	新 1			554	や	也 100					100
す	春 72	寸 70	須 41	数 2		185	ゆ	由 55					55
せ	世 129	勢 1				130	よ	与 79					79
そ	曾 95	楚 6				101	ら	良 209	羅 1				210
た	多 344	堂 38	太 11			393	り	里 181	利 176				357
ち	知 105					105	る	留 234	累 14				248
つ	つ 148	川 84	徒 29	津 1		262	れ	礼 121	連 31				152
て	天 320	帝 9	亭 1			330	ろ	呂 48	路 12				60
と	止 462	登 12				474	わ	和 56	王 4				60
な	奈 390	那 22				412	ゐ	井 7	為 5				12
に	爾 300	仁 29	丹 28	耳 18	二 1	376	ゑ	恵 15					15
ぬ	奴 44					44	を	越 108	遠 84				192
ね	祢 33	年 1				34	ん	无 49					49

〈表4〉『絵入源氏』三種類の字母表

仮名	慶安本・字母				合計	万治本・字母				合計	小本・字母				合計
あ	安 85	阿 68			153	安 125	阿 4			129	安 153	阿 7			160
い	以 227				227	以 212				212	以 245				245
う	宇 222				222	宇 220				220	宇 283				283
え	衣 85				85	衣 84				84	衣 85				85
お	於 239				239	於 220				220	於 237				237
か	可 415	加 7			422	可 407	加 5			412	可 410	加 24			434
が	可 69				69	可 67				67	可 64				64
き	幾 272	起 7			279	幾 214	起 44	支 2		260	幾 236	起 95			331
ぎ	幾 45				45	幾 22	起 7			29	幾 36	起 12			48
く	久 195				195	久 192				192	久 210				210
ぐ	久 34				34	久 36				36	久 40				40
け	計 70	个 55	遣 1	氣 1	127	計 81	个 47			128	計 68	遣 33	个 27	氣 1	129
げ	計 42	遣 3	希 2		47	計 42	遣 1			43	計 27	遣 24	个 2	氣 2	55
こ	己 212				212	己 188	古 1			182	己 242	古 8			250
ご	己 30				30	己 24				24	己 38	古 1			39
さ	左 211	佐 2			213	左 204	佐 6			210	左 201	佐 19			223
ざ	左 31				31	左 30				30	左 32				32
し	之 434	志 66			500	之 439	志 60			499	之 446	志 77			523
じ	之 44				44	之 41	志 3			44	之 50	志 4			54
す	寸 91	春 16	須 1		108	寸 96	春 12	須 2		110	寸 56	春 49	須 6		111
ず	寸 62	須 8	春 5		75	寸 69	須 3			72	寸 47	須 19	春 10		76

せ	世 126	勢 2			128	世 127	勢 1			128	世 119	勢 13			132
ぜ	世 4	勢 1			5	世 4				4	世 4				4
そ	曾 82				82	曾 83				83	曾 83				83
ぞ	曾 21				21	曾 19				19	曾 21				21
た	多 277	太 25	当 4		316	多 252	太 10	当 5		267	多 252	堂 29	太 6		287
だ	多 38	太 6			44	多 39				39	多 34	堂 6	太 2		42
ち	知 89	地 3			92	知 84	地 4			88	知 102				102
ぢ	知 14				14	知 9	地 1			10	知 13				13
つ	川 180	津 11	徒 1		192	川 163	徒 6			169	川 147	津 18	徒 6		171
づ	川 62	津 3			65	川 57	徒 1			58	川 62	津 2	徒 1		65
て	天 260	亭 15			275	天 255				255	天 252				252
で	天 50	亭 2			52	天 47				47	天 59				59
と	止 378	登 5			383	止 378	登 2			380	止 400	登 10			410
ど	止 119				119	止 111	登 1			112	止 120	登 1			121
な	奈 385	那 17			402	奈 394	那 3			397	奈 398	那 27			425
に	爾 361	仁 14	耳 5		380	爾 250	仁 117	丹 10	耳 3	380	爾 260	仁 122			382
ぬ	奴 45				45	奴 45				45	奴 45				45
ね	年 18	祢 16			34	祢 22	年 11			33	祢 24	年 17			41
の	乃 297	能 113			410	乃 349	能 46			395	乃 342	能 78			420
は	八 169	者 111	波 44	盤 5	329	八 234	者 54	盤 22	波 8	318	八 210	者 110	波 15	盤 7	342
ば	八 55	者 25	波 11		91	八 40	者 41	盤 6	波 4	91	八 56	者 31	波 5		92
ひ	比 152	日 1			153	比 152				152	比 155	飛 2	日 1		158
び	比 29				29	比 28	飛 1			29	比 32				32
ふ	不 118	婦 3	布 1		122	不 124				124	不 115	婦 13			128
ぶ	不 4				4	不 4				4	不 7	婦 4			11
へ	部 136	遍 2			138	部 139				139	部 142	遍 2			144
べ	部 45	遍 3			48	部 46				46	部 44	遍 3			47
ほ	保 74	本 14			88	保 57	本 27			84	保 69	本 28			97
ぼ	保 72	本 19			91	保 69	本 13			82	保 60	本 27			87
ま	末 265	満 29			294	末 155	満 53	万 24		232	末 200	満 49	万 14		263
み	三 124	美 50	見 1		175	三 107	美 19	見 15		141	三 115	美 82	見 3		200
む	武 39	無 4			43	武 41	無 3			44	武 47				47
め	女 92	免 3			95	女 92	免 2			94	女 82	免 14			96
も	毛 283				283	毛 257				257	毛 280				280
や	也 101				101	也 95				95	也 128				128
ゆ	由 42	遊 5			47	由 43	遊 1			44	由 50	遊 3			53
よ	与 79				79	与 80				80	与 81				81
ら	良 206				206	良 209				209	良 212				212
り	利 341	里 13			354	利 323	里 12			335	利 309	里 46			355
る	留 236	累 12			248	留 242	流 6			248	留 224	流 23	累 1		248
れ	礼 149				149	礼 121	連 19			140	礼 116	連 38			154
ろ	呂 63				63	呂 47	路 1			48	呂 51	路 20			71
わ	和 50	王 6			56	和 48	王 6			54	王 34	和 27			61
ゐ	為 12	井 4			16	為 14	井 1			15	為 16	井 3			19
ゑ	恵 9				9	恵 8				8	恵 10				10
を	遠 179	越 7			186	遠 182	越 1			183	遠 146	越 45			191
ん	无 92				92	无 94				94	无 137				137

(表5) 『絵入源氏』三種類の使用字母数、及び三条西家本・専修大学本の使用字母数

字母数	1	2	3	4	5	総数
慶安本	16	24	6	1	1	91
万治本	16	25	5	2	0	89
小本	16	23	7	2	0	91
三条西	9	25	11	2	1	105
専修大	12	22	9	4	1	104

母のものは二五例、三つの字母は一一例、四つの字母は二例、五つの字母は一例である。使用字母数の総計は一〇五になる。専修大学本は、一字のひらがなを一つの字母で表記するものは一二例、二つの字母は二二例、三つの字母は九例、四つの字母は四例、五つは一例。使用字母数の総計は一〇四になる。こうしてみると一字を一字母のみで表記する例は、三条西家本では九例、専修大学本では一二例になる。パーセンテージに換算すると、三条西家本は一九%、専修大学本は二五%になる。このことから、写本の書写者は、現在の我々のように一字一字母で統一する意識は低く、一字多字母を原則としてひらがなを表記しているといえる。

『絵入源氏』の慶安本、万治本、小本の使用字母を、(表4)の一覧表にした。『絵入源氏』では、一字一字母の表記は、慶安本、万治本、小本ともに一六例になる。一字に二字母は、慶安本二四例、万治本二五例、小本二三例。一字に三字母は、慶安本六例、万治本五例、小本七例。一字に四字母は、慶安本一例、万治本二例、小本二例。一字に五字母は、慶安本に一例、万治本、小本ともになし。使用字母数の総計は、慶安本と小本がともに九一例、万治本が八九例である。写本と比較すると、一字一字母の表記は、『絵入源氏』が多いことがわかる。一字一

字母をパーセンテージに換算すると、慶安本、万治本、小本、ともに三三%になる。これら『絵入源氏』三種類の本文と、写本の使用字母の数を、(表5)にまとめてみた。写本より、整版本の『絵入源氏』の方が、一字一字母で表記する意識が高いことがわかる。版本は使用字母を抑制し、読みやすさを優先していると考えられる。写本で『源氏物語』を楽しんでいた階層の人物が、版本の『絵入源氏』を手にとったとしたら、いささかの違和感とともに、抜群に読みやすいと感じたはずだ。

二、『絵入源氏』三種類の使用字母

ひらがな一字に二つの字母を用いる例、すなわち一字二字母は、写本と版本ともに似通った数である。しかし、その内実は、整版本の『絵入源氏』ではより一字一字母の意識が高い傾向にあるのではないか。『絵入源氏』を見てみると、基本的は一字一字母で、その補助のごとく別の字母をごく少数、用いている例が多い。具体的には、「ゆ」の字母は、三本ともに「由」を主に用いており、その補助として「遊」が少数用いられている。このことから、慶安本も万治本も小本も、「ゆ」の字母は、「由」を主として用い、「遊」をごく少数、補助的に用いる意識があったということになる。主たる字母(主字母)に、それに副える少数の字母(副字母)とでもいうべき関係である。

もちろん、そうした主字母に副字母という関係は、『絵入源氏』のみに見られるものではなく、写本の専修大学本にも確認できる。例えば、専修大学本は「あ」では、「安」が一五二例、「阿」を四例で、「安」を主字母にして、ごく少数、「阿」を副字母として用いている。同じよう

な例は、「こ」「せ」「そ」「ね」「む」「も」「ら」「わ」「ぬ」などが確認できる。これらのひらがなは、基本的には一字一字母のような意識がありながら、しかし何らかの事情によって、別の字母を少しだけ用い、結果的に一字二字母として分類されたものと考えられることもできる。もちろん、これは単純な書写者の書き癖、あるいはたまたまその時にそう書きたかったという気分が属するものであるから、理論化は不可能なものかもしれない。ただ、理論化が不可能だから考察が不毛というわけではなく、『絵入源氏』の三本を比較すると、それぞれのテキストの字母の用い方の差異から、テキストの性格が浮かびあがっているように思われる。

たとえば「あ」だが、慶安本は「安」が八五例、「阿」が六八例。どちらの字母も、用いられている数が多いために、主／副字母という意識はなかったと思われる。ところが、万治本、小本ともに「安」が圧倒的に多く、「阿」は少なく、「安」を主字母に、「阿」を副字母にしていることがわかる。「あ」に関しては、慶安本と万治本、小本は字母への意識が違うのだ。

一方、「を」に目を転じると、慶安本、万治本はともに「遠」が多く、「越」は少ない。このことから、「遠」を主字母、「越」を副字母とする意識があったと思われるが、小本は「遠」が一四六例、「越」が四五例。いささか「越」が多い。小本の「越」は、パーセンテージにすると二四％、およそ全体の四分の一。「を」を書く四回のうち一回は「越」を用いていることになる。副字母(補助的な少数の字母)というにはいささか数が多い。小本は慶安本を手本としていたはずだから、慶安本と同じ字母を使ってもよかったはずだ。しかし、小本の制作者は「遠」を多用するのではなく、「越」に改めていることになる。

主／副字母に分類できるものは、慶安本では、「か(が)」「き(ぎ)」「さ(ざ)」「せ(ぜ)」「ち(ぢ)」「と(ど)」「ひ(び)」「ふ(ぶ)」「へ(べ)」「む」「め」「ゆ」「わ」「ゐ」「を」。万治本では、「あ」「か(が)」「こ(こ)」「さ(ざ)」「せ(ぜ)」「ち(ぢ)」「つ(づ)」「と(ど)」「な」「ひ(び)」「む」「め」「ゆ」「る」「ろ」「わ」「ゐ」「を」。小本では、「あ」「こ(こ)」「へ(べ)」「ゆ」「ゐ」。以上が、かなり明確に主／副字母の関係にあるように思われる。これらを並べてみると、慶安本と共通する数が多いのは、万治本である。慶安本と万治本は一二が共通している。一方、慶安本と小本が共通するのは、三つである。このことから、万治本は慶安本と同じような字母の用い方をしているが、小本は慶安本とは違う用い方をしているということがわかる。

多く用いられる主字母と、補助的な少数の副字母という視点からではなく、使用字母のみを見ても、慶安本、万治本、小本は用いる字母の趣が異なっている。慶安本、万治本、小本の使用字母を眺めてみると、使用字母の傾向が違っているものがいくつかある。具体的に見ていきたい。まずは慶安本の特異な傾向である。慶安本は「る」の字母はもっぱら「留」で、二番目に用いられる字母は「累」であるが、小本、万治本は二番目に用いる字母は「流」で、万治本は「累」を字母に用いることはなく、小本は一例「累」を用いている。慶安本の「ひ(び)」の字母も、「日」を補助として用いているが、万治本では補助で用いるものは「飛」のみ。小本は「飛」と「日」を用いている。万治本の特異な傾向に目を転じると、万治本では、「き」の字母に「支」を用いているが、その字母は慶安本や小本には用いられていない。「つ(づ)」の字母は「川」が三本とも圧倒的に多いが、慶安本、小本では、二番目に多い字母は「津」、三番目に多い字母は「徒」である。万治本は「徒」が

二番目に多い字母で、慶安本、小本とは傾向が異なっている。小本は字母の用い方が異なる例が三例あり、目を引く。一つは「け(げ)」である。「計」「个」「遣」…となる。ところが小本は「計」「遣」「个」…で、「遣」の方が、「个」よりも多く用いている。いま一つは「た(だ)」である。慶安本、万治本、小本ともに「多」が圧倒的に多いことは変わらない。ただし、二番目に多く用いられる字母が、慶安本、万治本は「太」、三番目の字母は「当」。小本は二番目の字母は「堂」、三番目が「太」である。慶安本、万治本は「堂」の字母は用いないが、小本は用いており、小本は慶安本、万治本とは違う字母を用いている。いま一つ「わ」は、慶安本、万治本ともに、「和」を主字母にし、「王」を副字母にしている。ところが、小本は「王」を三四例、「和」は二七例用いており、慶安本、万治本とは字母の用い方が異なっている。

慶安本、万治本、小本、それぞれが独自に字母を用いることがある。しかし、おおむね万治本も小本も、慶安本の字母の使用状況とほぼ同じ傾向で、万治本も小本も慶安本の影響にあったことは疑いない。ただし、万治本、小本、ともに微妙に慶安本との距離の取り方が異なっている。特異な例はあるにせよ、万治本は慶安本の字母の使い方と同調する傾向が高いのに対して、小本は慶安本の字母の使い方とは異なっている傾向がある。すなわち、万治本は慶安本をそのまま写そうとする意識が高いのに対し、小本は慶安本に違和感を感じ、改める意識があったのである。

三、『絵入源氏』三種類の使用字母の比較

特定のひらがなに絞り、同じ文の中で、慶安本、万治本、小本ではどう字母が表記されているのかを比較してみたい。例えば「に」を対象にすると、「世のためしにも」(傍点引用者、以下同じ)という同文で、慶安本は「仁(に)」、万治本は「丹」、小本は「爾」となっている(図版1)。こうした同文で、慶安本、万治本、小本という三本がひらがなを用いている場合、どのような異同があるのかを比較していくのである。この調査の目的は三本の比較であるから、三本のうち、いずれかの本が漢字を用いており、字母が採取できない場合は、考察の対象外とした。例えば、慶安本「何事のぎしき」(二丁ウ)の「何事」は、万治本、小本ともに「なに、事のぎしき」(万治本一丁ウ・小本一丁ウ・二丁オ)とひらがなになっており、字母が採取できるが、慶安本は漢字であるため(図版1)三本のひらがなの字母比較

【慶安本】一丁オ一一行目

字母の採集は不可能である。こういう場合は、カウントの対象外とした。

【万治本】一丁オ一四行目〜一五行目

【小本】一丁オ一一行目

まずは、「わ」を対象にした調査の結果を見ていきたい。先に検討したように「わ」は、慶安本、万治本ともに「和」を

「た」は、三本とも「多」が二二五例、「太」が一例で、三本一致は計二二六例である。これ以外の例から、慶安本と万治本が一致し、小本が異なる例は、二五例。慶安本と小本が一致し、万治本が異なる例は一七例。慶安本と万治本が同じ字母を用いる傾向が高く、小本が慶安本と同じ字母を用いる傾向は低いと言える。

ただし、これはあくまで傾向で、すべてのひらがなに適合できるわけではない。例えば「に」の字母の比較結果〈表9〉では、それまでの結果とはいささか異なっている。

〈表9〉『絵入源氏』三本の「に」字母の比較

パターン								慶安	万治	小本	実数	%
仁	仁	仁	爾	爾	爾	爾	爾					
仁	爾	爾	丹	仁	仁	爾	爾					
仁	仁	爾	丹	仁	爾	仁	爾					
3	3	6	8	47	62	62	175					
1	1	2	2	12	16	16	46					

パターン								慶安	万治	小本	実数	%
爾	耳	仁	耳	耳	仁	耳	爾					
丹	仁	仁	爾	仁	丹	爾	耳					
仁	爾	爾	仁	仁	爾	爾	仁					
1	1	1	1	1	1	2	3					
0	0	0	0	0	0	1	1					

「に」は、三本とも一致する例は一七八例である。これ以外の例で、慶安本と万治本が一致し、小本が異なる例は六三例ある。慶安本と小本が一致し、万治本が異なる例は六五例ある。「に」に関しては、慶安本と万治本が一致し小本が異なる例も、慶安本と小本が一致し万治本が異なる例も、ともにほぼ同じ用例数となる。したがって、万治本は慶安本と同じ字母を用い、小本は慶安本と同じ字母を用いない、とは、すべての

文字に対しては言えず、あくまで「傾向」という言葉で表現されなくてはならない。万治本は慶安本と同じ字母を用いる傾向が高く、小本は慶安本と同じ字母を用いる傾向が低い、と言わなくてはならないのである。

これらの結果から、万治本と小本は、ともに慶安本を手本にしているわけだが、その手本の仕方が、万治本と小本では微妙に異なっていると考えざるをえない。万治本は、慶安本を写すさいに、その字母を変えることはあまりしない。それだけ慶安本を忠実に写そうとしようとする意識があったと考えられる。一方、小本は、慶安本を写すさいに、その字母を変えることが多い。このことから、小本は慶安本に心理的な距離を置いており、批判的に写していたと考えられる。

おわりに

以上、「桐壺」巻のみだが、『絵入源氏』三種類の本文の字母を概観してきた。まだまだ考察の余地が残されているが、ひとまずのまとめをした。『絵入源氏』の字母は、写本の字母と比較すると、写本は多様な字母を用い、一字多字母の傾向が高いが、『絵入源氏』の三種類の本文は、どれもが一字一字母の傾向が高く、字母を比較的抑制していることがわかる。多くの字母を用いることは、読者にそれなりの知識を要求することになってしまふ。多くの読者を対象とする、大量出版の整版本では、多くの字母を用いることは敬遠され、字母を抑制する傾向があることがわかった。

また、『絵入源氏』三種類の使用字母をみると、慶安本の使用字母と、万治本、小本の使用字母はほぼ同じで、慶安本を手本にして、万治本、

小本が生まれたことは間違いがない。ただ、使用字母を見る限り、万治本と小本、それぞれの本は、手本とした慶安本とのギャップに相違点がある。万治本は慶安本の字母の使い方が似て、慶安本をそのまま写そうとする意識がある。小本は慶安本の字母を改める事が多く、慶安本に対する懸隔を感じさせる。万治本と小本の、慶安本への対し方の違いは、特定のひらがなを対象にした、同文での字母の比較でも、同じ傾向が確認できた。すべての字において適応できるわけではないが、万治本は慶安本の字母を変更することはあまりしない傾向があり、小本は慶安本の字母を変更を頻繁にする傾向がある。すなわち、万治本は慶安本の字母をそのまま用いる傾向があり、小本は慶安本の字母を改める傾向があるということである。ことから、万治本は慶安本を忠実に写す意識があり、小本は慶安本に批判的で、改めるべきところは改めるという意識があったことが推定できた。

字母の使い分けは、古く『悦目抄』にその基準が示されており¹¹、同様の基準は、江戸時代の『男重宝記』にも示されている¹²。ひらがなを使うにも、その字母に心を配ることが当たり前文化があった。ところが、我々は一字一字母の文化に浸りきっているため、かような一字多字母の文化の文字生活を想像することは難しい。一字一字母の教育は識字率を高め、日本語の近代化のために避けることのできないことだったといえ、しかしそれによって失った尊い感覚は、確実にある。そうした感覚を無視して、作者自筆の本でもない活字テキストを根拠に、やれ作者の心情が云々と、したり顔で述べることがどれだけ有益なのか疑問である。もちろん、ここで私が言いたいことは、作者自筆本がなければ研究を認めないだとか、写本の研究をしない（できない）人間は研究をやる資格がないだとか、活字本での研究は研究として認めないといった類

の、排他的で偏狭なことではない。そもそも一字多字母の理論によって生み出されたはずのテキストを、一字一字母の理論によって生まれた活字テキストのみで精確に理解しうるのか、疑問なしとはしない、というだけである。口承で伝えられていた文化、紙に書きつけられる文化、印刷出版文化、それぞれの文化では、物語に対する意識は変容していった¹³。一字多字母の文化から、一字一字母の文化への切り替えも、大きな意識変革をもたらしたはずである。同じ一文字であっても、多字母文化における一文字には、多様で豊かな、さまざまの想いがこめられているのであって、その一文字の重さを、我々は理解する努力をしなければならぬ。

1 本稿で用いた慶安本は、国文学研究資料館本〔サ426/1〕を基軸にし、ノートルダム清心女子大学本〔E16/541/黒川本〕、早稲田大学本〔文庫30_20007〕を補助として用いた。万治本は、早稲田大学本〔文庫30_20153〕を基軸にし、国文学研究資料館本〔サ41/1〕、大阪女子大学旧蔵本〔91336/M2-22/1〕、福井市立図書館松平文庫〔文33/35/1〕を補助として用いた。小本は、複製の『源氏物語』（日本文化資料センター 一九八四年）を基軸にし、早稲田大学本の二セット（〈12_02185〉〔文庫30_20152〕）、国文学研究資料館本〔サ433/1〕を補助として用いた。なお、図版に用いた本文は、人間文化研究機構 国文学研究資料館所蔵本（慶安本〔サ426/1〕、万治本〔サ41/1〕、小本〔サ433/1〕）である。

2 なお、総文字数では、「ゝ」「ッ」「々」「く」「ぐ」の踊り字はカウントしていない。句読点・合点もカウントしていない。また異文注記、傍記、ふりがな、ふりがな付き漢字に付されている踊り字も、カウントしていない。本行本文のみをカウントした。ちなみに、慶安本の「ゝ」は一二二字、「ッ」は四三字、「々」は一五字、「く」は二九字、「ぐ」は二〇字、合計二二九字。万治本の「ゝ」は一〇五字、「ッ」は四二字、「々」は二字、「く」は

- 三一字、「く」は二〇字、合計二二〇字。小本の「、」は一八字、「ゞ」は四五字、「々」は二二字、「く」は三二字、「く」は一九字、合計二二六字。
- 3 分析の対象としたひらがなは、本行本文のみに限定し、傍記・ふりがななどは分析の対象としていない。また、ひらがなの字母の分類は、それぞれのひらがなを構成する字母の漢字を優先し、そのくずしかたなどは考察の対象としていない。すなわち、同じ字母の漢字であっても、字母の漢字の形をそのまま保ったものと、漢字の形を保たず、くずれている場合であっても、同じ字母のひらがなとして認定している。くずし方などは見る人間によって印象が変わり、明瞭で正確な分類ができないため、今回の調査では、あくまで字母の漢字によって分類する手法（字源主義）を用いた。また、漢字か仮名か明確にできないものについては、漢字と仮名の使用状況と文脈を分析した上で、明らかに表意文字として成立すると認められるものは漢字として分類した。
- 4 築島裕「文字」(『平安時代語新論』東京大学出版会 一九六九年)、今野真二『仮名表記論攷』(清文堂出版 二〇〇二年)、矢田勉『国語文字・表記史の研究』(汲古書院 二〇二二年)など。
- 5 伊藤鉄也「源氏物語字母考―玉鬘十帖の「けしき」と「けはひ」―」(『源氏物語研究』第四号 一九九四年一〇月)は、「けしき」「けはひ」の語に限定し、巻も玉鬘十帖に限定して字母を採集・分析している。
- 6 この本の底本となった三条西家本は、現在は日本大学に蔵されている三条西家本と同一のもの。日本大学の本も『日本大学蔵源氏物語』(第一巻 八木書店 一九九四年)として公刊されている。
- 7 なお、専修大学本の場合も、本行本文のみを分析の対象とし、傍記・ふりがななどは分析の対象外とした。
- 8 本稿での『絵入源氏』三本の字母の採取は、本行本文のひらがなを分析の対象とし、傍記・傍注・ふりがなのひらがなは分析の対象外とした。
- 9 副字母は、ごく少数用いられるものとして、とりあえず二桁の数字にならないもの(すなわち、九例までのもの)を選んだ。
- 10 ただし、厳密な百分率の数値を、小数点以下で表示しはじめると際限がな

くなるため、百分率で計算した結果を、四捨五入した数値を示している。したがって、%を合計すると、九九や一〇一になる場合や、〇%という数値が出ている場合もある。本稿で示した数値は、割合を知覚しやすくするための概算数である。

11 日本歌学大系 第四巻 風間書房 一九五六年 一四七頁。

12 「醜刻 女重宝記・男重宝記―江戸時代における家庭教育資料の研究―」(『日本史学教育研究所調査資料』第二二二号 一九八五年二月)。

13 ウォルター・J・オング『声の文化と文字の文化』(藤原書店 一九九二年)。

※本研究はJSPS科研費22820043・24720099の助成を受けたものです。